

# 保育の世界を豊かに 生きる子どもたち③

## 一斉活動を創造的に生きる

榎沢良彦  
(大学教員)

園生活においては、適宜、さまざまな保育形態が取られている。その一つとして、いわゆる一斉活動がある。

保育形態は子どもたちに何らかの成長を期待して、意図的に選ばれる。一斉活動の場合には、例えば「子どもたちがみんなと一緒に活動することを楽しむことで、共同的に活動する力を培う」などの目的が考えられるだろう。果たして子どもたちはそのような目的に向かって一斉活動を生きているのだろうか。また、保育者自身は一斉活動をどのように生きているのだろうか。一斉活動における子どもと保育者双方のあり方を明らかにすることにより、子どもたちがより豊かに生きられるような一斉活動のあり方が見えてくるのだろうか。

そこで、本稿では、ある幼稚園でのダンスの練習場面を取り上げて、その練習を子どもたちと保育者がどのように生きているのかをつぶさに見てみたい。

榎沢良彦(えのさわよしひこ)

東京家政大学家政学部教授。

保育の世界を当事者がどのように生きているのかを考え  
ています。著書：『生きられる保育空間』学文社。

五歳児全員がホールに集まる。全員からよく見えるように、I先生が舞台上に立つ。他の先生たちは子どもたちの中に入っている。子どもたちはI先生の方を向いて、床に立つ。まず、I先生が手本となってダンスの振りをやってみせる。子どもたちはI先生の振りをまねて身体を動かし、練習する。どの子どももI先生をしつかり見て、まねることに専念する。

ひとしきり練習した後、今度は、五人ずつのグループになり、手をつないで輪をつくるように指示が出される。子どもたちは小グループになった途端、グループ内でお互いを意識し合い歓声を上げる。先ほどよりも会場がにぎやかになる。音楽に合わせながら、かつ、振りを教えるI先生の声を聞きながら、子どもたちはみんなで踊る。子どもたちはI先生の音声の指示通りに正確に振りを行おうとはしていない。子どもたちはグループの仲間としてたわむれ合っているという様子である。例えば、一人がバランスを崩して尻もちをつくと、それを面白がり、他の子どもたちも同じように尻もちをつく。さらに、本来の振りにはない「片足ジャンプ」をする子もいる。

この一連のダンスの練習において、前半と後半とでは子どもたちのあり方は全く異なっている。前半では、保育者が手本を示し、子どもたちはそれをまねて、同じように身体を動かそうとしている。つまり、動きを覚えようとしている。従って、この時、保育者と子どもたちの関係は「教える者―学習する者」の関係である。それ故、子どもたちは保育者の動作や言葉をすべて「指示」として受けとめ、正確に（間違わないように）行動しようとする。その結果、当然のことではあるが、すべての子どもたちの行動は同じものになる。保育者自身、

そのことを子どもたちに期待しているので、ふざけている子がいれば、子どもたちの中には保育者の誰かがふざけを止める働きかけ（注意）をする。このように、前半においては、「保育者はダンスを教え、子どもたちはダンスを覚える」というように、両者とも目的を遂行するあり方をしている。

一方、後半ではどうだろうか。子どもたちが輪になって踊り始めた時、子どもたちの前から「教える者」は消え失せている。目の前にいるのは「仲間」である。子どもたち同士は「教える者—学習する者」の関係をなしてはいない。全く対等な関係である。従って、互いに相手を「手本」として行動してはいない。子どもたちは他者の束縛から自由に生きることができきる。それ故、子どもたちは相互に仲間の振りや動作に同調し、触発されて行動する。その結果、保育者の手本とは全く異なる創造的な振りや動作が容易に生まれる。片足ジャンプはまさにその例である。

このように、枠にはまらず創造的に踊る子どもたちは生き生きしており、それ故見ている者をも楽しい気分にしてくれる。この時の子どもたちは、「正確に振りを覚え、ダンスを踊る」という目的を遂行しようとしているのではない。ただ、子どもたちは曲に合わせてたわむれているだけである。すなわち、遊ぶあり方をしているのである。

ところで、この「枠にとらわれず相互に同調し合う動作」は、枠（決まった振りから成り立っているダンス）から大きく外れていく可能性を持つている。つまり、子どもたちの動きが、特定の音楽に合わせたダンスではなくなる可能性があるのである。例えば、偶然に起きた尻もちをつくことを子どもたちはまねた。みんながまねをして尻もちをつきだしたら、ダ

ンスは中断してしまうだろう。しかし、実際にはそのようにはならず、曲に合わせたダンスは継続する。何故、子どもたちは遊びながらダンスを踊り、覚えることができるのだろうか。そこには、保育者の絶妙なかわり方が存在しているのである。

子どもたちが輪になって踊り始めた後も、I先生は手本を示しながら、適宜、振りを言葉で教える。とは言え、もはやI先生と子どもたちは「教える者―学習する者」の関係にはないので、子どもたちが先生の言葉の指示を真剣に聞く可能性はない。I先生自身それを承知している。すなわち、I先生は子どもたちの自由で創造的な動作を認めているのである。この点は、子どもたちの中にいて一緒に踊っている保育者たちも同様である。そのことは、保育者の教える者としての影響が弱まり、その分、子どもたちと保育者たちの応答が対等な者同士の応答へと変わってきたことを示す。しかしながら、一方で、I先生は手本を示し続けてもいる。つまり、I先生は子どもたちに対して「手本に倣うこと」と「自由に振る舞うこと」という矛盾したあり方を求めているのである。むしろ、矛盾したあり方を許容していると言わなければならない。

このような保育者の両義性により、子どもたちは「手本に倣いつつ自由に振る舞う」という両義的な生き方をするのである。そして、そのような生き方を繰り返し返すことを通して、手本に倣うことと自由に振る舞うことを無自覚的に自己の内に統合していくのである。その結果、子どもたちのダンスは独創的なものになるのである。

以上のように、たとえ一斉活動であっても、両義的な生き方が認められているなら、子どもたちは与えられた活動を新たなものへと主体的に創造することができるのである。